



説教要旨「挫折の中で示される道へ」

使徒言行録 16章 1～10節

同僚であったバルナバと対立し、別れ別れに度だったパウロに、テモテという若者との出会いが与えられました。パウロは以後、このテモテを伝道旅行に同行させます。テモテはパウロの助手となり、パウロのもとで伝道者として成長していきます。

テモテとの出会いを与えられたパウロは、当時の大都市であったエフェソという町へ行って伝道しようと計画しましたが、計画変更を余儀なくされたようです。その理由を使徒言行録は説明していませんが、パウロの書いた手紙の記述から何らかの病気が原因であったと推察できます（ガラテヤ 4:13）。計画が思い通りにならず、当初は全く考えていなかった方向へと曲げられてしまうこと。それはパウロにとって大きな苦しみであり、挫折だったことでしょう。

大きな挫折を覚えつつ港町トロアスに着いたある夜、パウロは1人のマケドニア人が助けを求める幻を見ました。この幻を見たパウロは、これまでの計画が思い通りに進まなかったその意味を悟り、神様の召しを確信し、マケドニア州へと向かうのです。

せっかくの立てた計画が、思いがけないことによって妨げられてしまうという挫折を、わたしたちもしばしば味わいます。挫折のただ中にあるとき、神様を恨みたくなることだってあります。けれどもそこで、やけを起したり絶望するのではなく、不本意な道であっても、そこで示された道を歩み続ける時に、神様の思いがけないみ心に気づかされるのです。それまでの苦難にすべて意味があって、必要な出来事だったことを知らされるのです。

思い通りにならないとき、挫折を味わうとき、そこから立ち上がって歩み出すために大切なことは、神様の愛を思い起こすことです。神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛されたのです。わたしたちを救うために、イエス様を十字架にかけられたのです。十字架に示された神の愛にすがりつくとき、新しい道が示され、挫折を味わったことの本当の意味が知らされるのです。思い通りにならず、苦しい試練を与えられた時にこそ、主の十字架を見つめることの出来るよう、祈り求めて参りましょう。

(2022・10・9 説教者：稲垣真実)